

所属 _____ 年 ____ 月 ____ 日

番号 _____ 氏名 _____

ドリル編 第1章

アカデミックワードと日常語

レポートや論文のような学術的な文章を書くときに、携帯電話でのメールのような言葉遣いをしてしまうと、内容がよくても、レポートや論文らしくない文章だと判断されてしまいます。また、レポートや論文には、普段文章を書くときにはあまり使わないような、レポート・論文特有の表現（アカデミックワード）があります。本章では、アカデミックワードと日常語の違いについて学びます。

STEP 1

1 ▶▶ 次の各文には、話し言葉的な表現や、携帯電話での友人同士のメールで用いられるような表現が含まれています。レポート・論文にふさわしい文に書き直してください。

① 1990年のデータだけで結論を出すべきじゃないよ。

② 今回は大学生30名にアンケートをとったけど、年代差を見るためには、中学生とか高校生にもアンケートをとらなきゃね。

③ 調査では、猫より犬の数がどんどん増えてるってことが分かった。

④ 三省大学の調査結果では、チャリンコか原チャリかのどっちかに乗ってる大学生の割合が72.5%だった☆

⑤ 『日本永代蔵』は貞享5年に刊行された！ なので、江戸時代の作品とゆうことになる。

⑥ これは、めっちゃ難しい問題・・・(涙)。

所属 _____ 年 ____ 月 ____ 日

番号 _____ 氏名 _____

ドリル編 第1章

アカデミックワードと日常語

STEP 2

2 ▶▶ レポートや論文では、他の文章では普通に使われる表現であっても、それらを使わずに、レポートや論文特有の表現（アカデミックワード）を用いることがあります。〈例〉にならって、次ページの①～⑩のそれぞれを、レポートや論文にふさわしい表現に書き直してください。

〈例〉 敬体ではなく常体	：	問題点は3点あります。	→	問題点は3点ある。
体言止めにしない	：	『雨月物語』を刊行。	→	『雨月物語』を刊行した。
倒置法を使わない	：	今後検討したい、この問題は。	→	この問題は、今後検討したい。
特有の表現を使う	：	私は	→	筆者は・本稿の筆者は
		この論文	→	本稿・本論文・小稿・拙稿
		この節／前の節／次の節	→	本節／前節／次節
		該当する分野	→	当該分野
		これまでに行われた研究	→	先行研究
		私が知っている限り	→	管見の限り
		～について言う・書く	→	～について述べる・論述する
		今まで言ったとおりである	→	前述したとおりである
		～については後で言う	→	～については後述する
		実験に協力してくれた人	→	実験協力者・被験者・インフォーマント
		自由に・適当に	→	任意に
		取り出す・抜き出す	→	抽出する
		互いに関係し合っている	→	相関している
		原因と結果の関係	→	因果関係

(次のような表現を用いることもあります。)

漢語にする	：	つくる	→	作成する
		帯電性を持つ物質	→	帯電性を有する物質
その他	：	言い換えれば	→	換言すれば・つまり・すなわち
		～を使う	→	～を用いる
		どんな手段	→	いかなる手段
		桜か桃	→	桜 もしくは・または・あるいは 桃
		リンゴとミカン	→	リンゴおよびミカン
		だから	→	従って・そのため・よって
		～かどうか	→	～か否か
		どちらか	→	いずれか

以下のPOINTは、昭和61年7月1日内閣告示第1号「現代仮名遣い」、及び、昭和48年6月18日内閣告示第2号「送り仮名の付け方」(昭和56年10月1日内閣告示第3号により一部改正)をもとにまとめたものです。

POINT 1 仮名遣い1：まずおさえておくべき6点

- A** 長音：ア列の長音=ア列の仮名に「あ」を添える。〈例〉おかあさん
イ列の長音=イ列の仮名に「い」を添える。〈例〉おにいさん
ウ列の長音=ウ列の仮名に「う」を添える。〈例〉くうき
エ列の長音=エ列の仮名に「え」を添える。〈例〉おねえさん
オ列の長音=オ列の仮名に「う」を添える。〈例〉おとうさん
- B** 助詞：助詞の「を」は「を」と書く。〈例〉やむをえない
助詞の「は」は「は」と書く。〈例〉こんにちは
助詞の「へ」は「へ」と書く。〈例〉故郷へ帰る
- C** 言う：「言う」は「いう」と書く。〈例〉こういうわけ
- D** オ列の仮名に歴史的仮名遣いで「ほ」「を」が続く語はオ列の仮名に「お」を添える。
〈例〉おおやけ(公)、こおり(氷)
「お」と書く語の覚え方の例：とおくのおおきなこおりのうえをおおくのおおかみとおずつとおった
(遠くの大きな氷の上を、多くのオオカミ十ずつ通った)
- E** 同音の連呼によって生じた「ぢ」「づ」は「ぢ」「づ」と書く。〈例〉ぢぢれる、つづく
- F** 二語の連語によって生じた「ぢ」「づ」は「ぢ」「づ」と書く。
〈例〉はなぢ(鼻血)、みかづき(三日月)

POINT 2 仮名遣い2：上記6点の次に確認すべき点

- G** 助詞の「は」を「は」と書く例にあたらないものがある。〈例〉いまわの際
- H** 漢字の音読みとしてもともと濁音である「じ」「ず」は「じ」「ず」と書く。
〈例〉じしん(地震)、りやくず(略図)
- I** エ列の長音で「い」を添える。〈例〉せい(背)、えいが(映画)

※「現代仮名遣い」の「本則」と「許容」

- 「じ」「ず」を本則とするが「ぢ」「づ」と書いてもよいもの。〈例〉せかいじゅう(世界中)、いなずま(稲妻)等
- ・ レポートや論文ではできるだけ「本則」に従って書くようにしましょう。

POINT 3 送り仮名1：「送り仮名の付け方」の「本則」6点と「通則」1点

- a** 活用語は活用語尾を送る。〈例〉憤る、生きる、荒い、主だ
- b** 活用語尾以外の部分に他の語を含む語は、含まれている語〔 〕の送り仮名の付け方によって送る。〈例〉動かす〔動く〕、語らう〔語る〕、勇ましい〔勇む〕、晴れやかだ〔晴れる〕、重んずる〔重い〕、確かめる〔確かだ〕、後ろめたい〔後ろ〕
- c** 名詞は送り仮名を付けない。〈例〉月、花

レポートを提出する前に、以下の点について確認しましょう。

POINT 1 これだけは守ろう

レポートを書く前に

- 提出締切はいつか。
- 提出場所はどこか。
- 体裁・書式の指定があるか。

用紙・表紙の付け方・綴じ方

- 用紙／表紙の有無／綴じ方に関する指示はあるか。
- 用紙は決められたサイズになっているか。
- 表紙・綴じ方は指示通りになっているか。

特に指示がない場合

- 表紙あるいは冒頭に、授業名・担当教員名・開講曜日と時限・提出期限を記載しているか。
- 表紙あるいは冒頭に、課題（レポートテーマ）を記載しているか。
- 表紙あるいは冒頭に、所属・学籍番号・氏名を記載しているか。
- 用紙をバラバラにならないような方法でとめているか（ホッチキス・糊付け等）。
※特に指示がなければ、横書きの場合は左上、縦書きの場合は右上をとめるのが一般的です。

分量・縦書き横書き・ページ振り・レイアウト・筆記具

- 分量（文字数・枚数）は決められた分量を守っているか。
※「〇〇字程度」の場合は、指定字数の80%～120%の分量が一般的です。
- 縦書き・横書きの指定を守っているか。
- 〇字×〇行の指定がある場合は、それを守っているか。
- ページを振っているか。
※特に指定がなければ、表紙を除いて本文最初のページから1ページと振ります。
- ページレイアウトの上下左右に適切な余白をとっているか。
※A4の場合、特に指定がなければ、上下左右にそれぞれ2.5cm前後の余白があるとよいでしょう。
- 手書きの場合、黒のペンで丁寧に清書しているか（鉛筆書きのままにしているか）。

書き方・校正

- 段落の冒頭は一字下げしているか（全ての段落をチェックすること）。
- 体言止めや倒置、「！」などを使っていないか。
- 話し言葉や日常語が混ざっていないか。
- 特に指定がない場合、文が「である」体で統一されているか（「～です」「～ます」が混ざっていないか）。
- ワードプロ書きの場合、変わったフォントを用いたり、不必要にフォントやポイント数・文字色を変えたりしていないか。
- 間違った箇所を修正液で消して修正しているか（ペンで黒く塗りつぶすなどしていないか）。
- 誤字や脱字はないか（ワードプロ書きの場合は特に誤変換に注意）。



所属 _____ 年 ____ 月 ____ 日

番号 _____ 氏名 _____

ドリル編 第25章

レポート課題とレポートを書く順序

レポートを書いてみよう —— スロット型教材 ——

第3部について

第1部と第2部では、分かりやすい文章の書き方について学んできました。この第3部では、これまでのことを踏まえ、実際にレポートを書く練習をします。

第3部の各章の構成は基本的に次のようになっています。

まず、課題を通して、レポートを書くために必要な知識やポイントを学びます。興味深い様々な架空の研究を題材として、特に気をつけてもらいたい部分を、無理なくトレーニングできるように工夫されています。積極的に取り組んでください。

その後、「スロット型教材」という教材を用いて、実際にレポートを書いていきます。スロット型教材では、第3部の全章を通して以下のレポート課題が出たという設定で、レポートを書くことになります。最後には、無理なく6000字前後のレポートができあがるようになっています（完成したレポートを107～112ページに示します）。

設定：共通科目「日本語表現」の期末レポート課題で、以下の課題が出たとします。

レポート課題			
科目名	共通科目:日本語表現	水曜日 1時限	
教員名	柄沢彦泰	対象学年	1～4学年
課題	授業の内容を踏まえ、自由にテーマを設定して論じなさい。		
分量	400字詰原稿用紙15枚程度 (約6000字)の分量であること。	サイズ 書式	A4横書き。行数と文字数は自由。 題名・学籍番号・氏名を記載した表紙を付けること。
提出期間	7月20日(火)～7月30日(金)(16:30まで)締切厳守 (いかなる理由でも、提出期限を過ぎたものは受理しない)		
提出場所	教務担当(事務センター1階)提出ポスト		

スロット型教材について

第3部で取り組む「授業の内容を踏まえ、自由にテーマを設定して論じなさい」というレポート課題は、大学で最もよく出る課題であり、同時に、最も書きにくい課題でもあります。さらに、原稿用紙15枚程度(6000字程度)という分量は、レポート課題の中でも、やや多めの分量です。これぐらいの分量になると、「なかなか書けない」と悩む人も多いようです。

しかし、難しいと思う人も、もう心配しないでください。レポートや論文の書き方には、実は、「型」があるのです。基本的な「型」さえマスターしてしまえば、一定レベル以上のレポートや論文を、ある程度の時間内に書くことができるようになります。

これから第3部で学ぶスロット型教材は、そのレポートや論文の「型」を身につけるためのものです。ここでは、その教材の一部をお見せします。

〈スロット型教材例〉

この章では先行研究について述べる。最初に、先行研究の概観について述べておく。このレポートのテーマである [①] に関する先行研究には、管見の限り、[②] [③] [④] [⑤] 等がある。



所属 _____ 年 ____ 月 ____ 日

番号 _____ 氏名 _____

ドリル編 第25章

レポート課題とレポートを書く順序

この教材の便利なところは次の点です。

- I [] のスロット部分に文言を埋めていだけで、レポートを完成させることができるので、レポートや論文のイメージを捉えやすく、書き方の「型」を、効率的に身につけることができます。
- II それぞれの事情にあわせて、[] 等のスロット部分に入れる文言を変更すれば、自分なりのレポートができあがります。当然、この教材を全くそのまま使うというわけにはいかないでしょうが、何も無いところからレポートを書くよりも、「このスロット型教材をアレンジしてレポートを書く」という方が、イメージを捉えやすいはずです。

第3部を通して基本的な「型」を身につけた後は、それをどのようにアレンジできるか考えてみてください。具体的には、大学等に出されるそれぞれのレポート課題にあわせて、スロット部分に入れる文言を変えてみたり、一部の文章を自分の分野の言い回しや用語に差し替えたり、必要に応じて章立てを変更したりすることになると思います。基本的な「型」を身につけた後は、どんどん自分なりに改良してほしいと思います。

分野によっては、書き方が異なる場合も多いと思います。しかし、その場合でも、「スロット型教材とは、ここが異なる」というように、スロット型教材を出発点として相違点をおさえていくと、当該分野の書き方を、より早くマスターできると思います。

ここで強調しておきたいことは、この教材で一度「型」を身につければ、それをアレンジするだけで、様々なレポートや論文に対応できるようになるということです。是非、積極的に取り組んで、基本的な「型」を身につけてください。

この章では、スロット型教材に先立って、レポートを書いていく順序について考えてみたいと思います。次の課題に取り組んでください。

STEP 1

- 1 ▶▶ ここでは、レポートを書いていく順序について考えます。実は、「書きやすく」「分かりやすい文章になる」順序、というものがあのです。

既に21章でお話しした通り、レポートや論文の基本的な構成は、だいたい以下の通りです。

第1章	はじめに	()
第2章	先行研究について	()
第3章	調査の概要	()
第4章	調査結果と考察	()
第5章	結論と今後の課題	()
	引用文献一覧	()

あなたがレポートを書くとしたら、どのような順序で書きますか。最初に書く章は1、二番目に書く章は2のように、上の () の中に数字を入れてみてください。第1章から順に執筆するという人は、初めから、1、2、3、……と書いてください。

ヒント…1、2、3、……と第1章から書くやり方も当然あると思います。しかし、いきなり、「第1章 はじめに」を書くのは、結構大変ではありませんか。

アカデミックワードと日常語

STEP 1 1 ▶▶ 解答例

- ①1990年のデータだけで結論を出すべきではない。
- ②今回は大学生30名にアンケートをとったが、年代差を比較するためには、中学生や高校生にもアンケートをとる必要がある。
- ③調査では、猫より犬の数が急激に増加していることが分かった。
- ④三省大学の調査結果では、自転車か原動機付き自転車かのいずれかに乗っている大学生の割合が72.5%だった。
- ⑤『日本永代蔵』は貞享5年に刊行された。よって、江戸時代の作品ということになる。
- ⑥これは、大変難しい問題である。

レポートや論文では、友人同士の会話や携帯メールでのやりとりのときに使うような表現を避ける必要があります。具体的には、以下のような表現に注意しましょう。

POINT 1 話し言葉と書き言葉の違い

- 「ね」「よ」「なあ」等の終助詞を使わない。
- 「じゃない」「してる」等、短縮したり省略したりした表現を使わない。
- 「どんどん」「ちょこちょこ」等の擬音語・擬態語を使わない。
- 「まじ」「めっちゃ」等の、いわゆる若者言葉を使わない。
- 「(笑)」や顔文字、☆!等の、携帯メールでよく使うような記号・表現を使わない。

STEP 2 2 ▶▶ 解答例

- ①筆者は、これまで大学生の体力について調査を実施してきた。
- ②先行研究の問題点は次の2点である。1点目は調査対象が少ないこと、2点目は調査対象に偏りがあることである。
- ③この問題についての研究は、管見の限り行われていない。
- ④本節では、対象とする作品の概要について述べる。なお、比較する作品については後述する。
- ⑤調査方法については、前節で述べたとおりである。
- ⑥調査の依頼については、電話あるいはEメールを用いた。

- ⑦江戸時代、大阪は多くの商人が活躍する商業都市だった。よって、「天下の台所」と呼ばれた。
- ⑧調査では、各作品から任意に5ページずつ抽出した。
- ⑨実験では、通気性を有する素材を用いた。
- ⑩被験者として、九州出身の20代の男性を選んだ。

レポートや論文には、特有の表現（アカデミックワード）があります。それらを使うことによって、より「レポートらしく」「論文らしく」なります。

POINT 2 論文らしい表現

- 敬体ではなく常体にする。
- 体言止めにしない。
- 倒置法を使わない。
- レポートや論文に特有の表現を使う（具体的な例はトレーニングシート2ページ〈例〉参照）。

STEP 3 3 ▶▶ 解答例

本節では、先行研究の問題点を指摘する。

前節までにおいて、川山海子の一連の小説についての先行研究として、本田（2002）、沢辺（2004）、原口・横山（2005）、新田（2006）を、それぞれ概観した。これらの先行研究は、いずれも、小説を詳細に分析し、そこから結論を導いており、小説の解釈としては一定の評価が与えられるものである。しかし、同じく川山海子の作品である詩と比較した先行研究は、管見の限り見あたらない。よって、本稿では、小説と詩の比較を行うことにより、この問題を考察していく。比較の方法については次章で述べることとする。

3は、実際の文章をレポートにふさわしい表現に書き直す問題です。レポートを校正するつもりで取り組んでみましょう。

レポート課題とレポートを書く順序

研究分野や書き手によって、多少の異なりがあると思いますが、一般的に言って、最も「書きやすく」「分かりやすい文章になる」順序は、以下のものでしょう。

STEP 1 1 ▶▶ 解答例

- 第1章 はじめに (6) あるいは (5)
第2章 先行研究について (1)
第3章 調査の概要 (2)
第4章 調査結果と考察 (3)
第5章 結論と今後の課題 (4)
引用文献一覧 (5) あるいは (6)

「第1章 はじめに」が一番最後に書くのがよい

多くの人は、このことを知らず、冒頭からレポートを書こうとします。その結果、なかなか書けない、ということになってしまうのです。では、どこから書き始めるのがよいのでしょうか。

「第2章 先行研究について」から書き始めるのがよい

答えは、「第2章 先行研究について」から書き始める、です。19章の方法で先行研究を探したら、図書館に行って、最低でも、論文2本は読むようにしてください。実際には、「レポートであれば先行研究を読む必要がない」という場合もあるかもしれません。しかし、先行研究を見ることによって、「その分野でどのようなことが研究されているのか」や「その分野の論文の書き方はどのようなものか」等が分かるので、本テキストでは、先行研究を大切にしたいと思います（先行研究を見ていれば、レポートの評価も高くなります）。入門的な論文で構いませんので、「最低2本読む」に挑戦してみてください（なお、卒業論文の場合は、もっと多くの論文を読む必要がありますし、教員によっては、レポートでも、より多くの先行研究を読む必要があるという人もいます）。

「第2章 先行研究について」を書くとき気分が楽になる

論文を読んだら、その論文がどのようなことを明らかにしているのか、早速、書

いてみましょう。もうそれがレポートの一部なのです。先行研究に書いてあることをまとめるだけなので、比較的簡単に、レポートを書くことができます。既にレポートを書いているという事実は、気分を楽にします。

次に「第3章 調査の概要」「第4章 調査結果と考察」を書く

「第3章 調査の概要」で、どのような調査をしたかを書きます。書き方のコツは27章で述べますが、自分が調査したことを書けばよいのですぐに取り組むことができます。それが終わったら、どのような調査結果になったのか、そして、その結果はどう解釈できるのかを「第4章 調査結果と考察」で、書いてみましょう。調査結果は、事実をそのまま書けばよいので、それほど難しくありません。考察は、やや難しい感じもしますが、不安を感じる必要はありません。「調査結果から、どのようなことが分かったのか（あるいは、調査結果を自分はどうのように考えるのか）」を、自分なりに、ストレートに書いてみましょう。期末レポートであれば、基本的にそれで大丈夫だと思います。

「第5章 結論と今後の課題」「引用文献一覧」を書く

ここまでできたら、レポートはできたも同然です。「第5章 結論と今後の課題」で、このレポートで分かったこと等を書き（29章で書き方のコツを述べます）、「引用文献一覧」を作成しましょう（23章を参照してください。見直しの時間を入れても、比較的、短時間で書くことができます）。

最後に「第1章 はじめに」を書く

そして、最後に、「第1章 はじめに」に取り組むわけですが。この段階では、もう、「レポートで取り組んだこと」「先行研究で明らかにされていること」「先行研究で明確になっていないこと」「調査の概要」「調査結果と考察」等は全て分かっています。それをそのまま書けばよいだけです。そうすれば、分かりやすい「第1章 はじめに」のできあがりです。同時に、期末レポートも完成するというわけですが。

どうですか。最初からレポートを書き始めるより、こちらの方が、簡単だと思いませんか。もしよかったら「先行研究について」から書くこの方法を試してみてください。レポートや論文は書ける部分から書いた方が気が楽ですし、自分なりの見通し（あと4時間くらいでできるな等）も持てるようになります。

このようなわけで、以下、このテキストでは、先行研究について（26章）→調査の概要（27章）→調査結果と考察（28章）→結論と今後の課題（29章）→はじめに（30章）の順で、進めていきたいと思っています。